

十字架の喜びと苦難

——外国人宣教師が日本に与えた影響に関する三つの事例研究

はじめに

十九世紀末から二十世紀初めにかけての外国から日本への伝道活動は、日本におけるキリスト教の発展に意義深い重要な貢献をした。^①プロテスタント・キリスト教は、例えば中国語の書籍、あるいは外国人宣教師や外国人クリスチャンなどさまざまな経路により日本にもたらされた。特に幕末と明治初期に欧米から帰国した日本人は、キリスト教の発展に大きな影響を与えた。加えて中村正直、津田仙、畠山義成、新島襄、沢山保羅、あるいは大儀見元一郎や横山錦柵といった人々の影響は、キリスト教の領域を越え、大きな拡がりを持つに至ったのである。薩摩藩の畠山が東京で開成学校の校長に就任したことにより、キリスト教はエリート学生の間で強い影響力を持つようになった。つまり開成学校は、一八七〇年代の東京における

キリスト教の発展に非常に重要な影響を及ぼしたと考えられるのである。日本におけるキリスト教の発展を考えると、その活動が中途半端に終わった人もいる。「米国聖公会伝道協会の新島襄」とも言える横山は、帰国直後、病気により日本伝道団を離れた。しかし幸いなことに、こうした例にもかかわらず、明治期日本の知識階級の間でキリスト教は絶大な影響力を持ったのであった。

本稿においては、欧米宣教師の三つの事例について論じたいと思う。各々の事例は宣教師活動の異なる様相を明らかにしている。最初の事例は静岡で活動したエドワード・W・クラーク、カナダ・ウエスレアン・メソジスト教会のデヴィッドソン・マクドナルドとジョージ・カックランおよび中村正直についてである。^②これは日本のキリスト教とキリスト教伝道に関する私の研究の中でも最も古いテーマであるが、こうした以前からの研究が、明治初期の関東地方に

H・A・アイオン

おける米国キリスト教の伝道活動を検討する現在の研究に大いに役立っている。つまりこうした研究により、一八七〇年代の日本のキリスト教の発展において、開成学校の知的環境と、海外でキリスト教に改宗した日本人がいかに重要な働きをしたかを指摘することができるのである。クラーク、あるいはカックランやマクドナルドといったカナダ人と出会う前の英国留学中に、中村はキリスト教に触れていた。同様に築地の開港地を越えて東京にキリスト教がもたらされるに際しては、米国留学中に改宗した畠山義成指導下の開成学校において教授されたキリスト教と英語が、大きな役割を果たしたのであった。

二番目は、明治末期と大正期におけるウォルター・ウェストンについての事例である。³⁾ 日本に登山を紹介したウェストンは日本では最も名の通った宣教師かもしれない。私にとつても登山の研究は非常に楽しいものである。そして最後の事例としては、サミュエル・ヘーズレット主教と一九三七年のアルバート・ホール事件を取り上げる。この事件については、まだ研究を継続中である。とにかく一九三七年から一九四五年に至るまでの日本聖公会とプロテスタント諸教派合同の問題は、私の興味を引いて止まない研究領域なのである。

1

カナダ・ウェスレアン・メソジスト教会⁴⁾では、一八七一年に開かれた伝道部の年会で海外伝道部の開設計画が初めて提案され、次の一八七二年の年会では早くも、日本が伝道地として選ばれた。これは疑いもなく、岩倉使節団の北米行きが日本人への関心を非常に高めたことに影響された結果である。一八七三年六月三〇日、ウェスレアン・メソジスト伝道部の開拓宣教師としてジョージ・カックランとデヴィッドソン・マクドナルドおよびその家族が横浜に到着した。⁵⁾ 明治初期における日本の当面の必要、即ち西洋の学術・文化を専門に修得する学校での、英語教師に対する大きな需要があったからである。その中で宣教師カックランとマクドナルドは、語学教育を通してキリスト教の布教活動が出来ると考えていた。英語と西洋の学術を学ぼうとする日本人の熱意は絶大なものであり、彼らは何をおいてもまず先に教師となる宣教師を探し出そうとしていたのである。

士族の改宗者の数が暗示しているように、キリスト教の布教は時代の要請にならなっていた。一八七〇年代の日本は変革の真っ只中であつたのである。最初に来たカナダ人が目にしたのは、敢えて変化を受け容れようとし、西洋の文物を諸手を挙げて歓迎する、開放的な社会的、政治的雰囲気であつた。初期の日本人受洗者は、五つの

主要な要因によりキリスト教に引き付けられた。その五つとは、愛国者としての感情、より高度の倫理的価値の追求、個人的な大志、仲間の強い促し、宣教師や日本人先達の人格である。

初期の日本人プロテスタントは、彼らの回心が日本を益すると信じていた。キリスト教は西洋文明の本質をなすものであり、日本がその近代化を急ぐためには西洋文明を採用せねばならないと考えられていたのである。また多くの人々にとってキリスト教は、徳川幕府の瓦解により儒教が信頼を失ったあとの真空状態を満たしうる、より高度の倫理規範を提供するものであった。個人的な大志により、キリスト教に引き寄せられた人もいた。というのは、新しい時代が来れば、西洋に関する高度の知識を持ち英語に熟達した人々に対する需要が増すのは確実だったからである。また友人や同級生の影響がその改宗の決定的な要因となった人もいた。キリスト教思想は多くの場合、友人や知人との関わりの中から拡がっていったからである。宣教師のカリスマ性・学識・思いやりのある人格、あるいは日本人先達の模範が、若く純真な学生の改宗を促したのであるが、彼らこそは改宗者の大多数を占めていたのである。キリスト教の魅力は霊的な信条や思想にあったのではない。日本人が改宗した場合の取り組み方が功利的であったこととあわせ、こうした事実の中に、その後宣教師に対する失望や期待はずれが生じた原因を見いだすことができる。

平穩だった一八七〇年代半ばに、二人のカナダ・ウェスレアン・メソジスト教会の宣教師が別々の日本人信徒集団を結成に導いた。中村正直の同人社を中心とする東京の小石川バンドと、マクドナルドの学生による静岡バンドである。この二つのバンドから後年、カナダ人の宣教師活動の成功に貢献する日本人の活動家、牧師の多くが輩出した。その間、一八七三年夏に来日した英国国教会と関係の深い海外福音宣布協会のA・C・ショー（軽井沢のショー、彼もカナダ上流階級家庭の若者）は、福沢諭吉の子供達の家庭教師をし、また福沢が設立した慶応義塾で教えた。ショーの後任としては、筆者の母校であるカナダ・オンタリオ州にある私立高校前校長のアーサー・ロイドや、他の英国あるいはカナダ人の海外福音宣布協会宣教師が、その仕事を引き継いだのである。^⑤

ウェスレアン・メソジスト伝道部の成功は静岡学問所のお雇い教師であった若い米国人信徒クラークとカックランとの好運な出会いに負うところが大きい。一八七三年秋、カックランと米国長老教会宣教師ヘンリー・ルーミスが静岡を訪問した時、クラークは東京帝國大学の前身である開成学校の助教に迎えられ、その町を離れようとしていた。静岡の関係者はカックランにクラークに代わって英語教師を務めるよう依頼した。カックランは自分の子供達のことを考え、最初はその提案を断ろうとしたが、やがてこれは宣教師にとつて、開港地の外に居住出来る初めての機会であることに気づいた。

そこで結婚していたが未だ子供のなかったマクドナルドに、彼の代わりにもそこへ行くことを引き受けさせたのである。

一八七四年四月、マクドナルドとその妻は静岡に到着し、その後四年間、教育と医療に携わった。静岡における最初の宣教師、西洋医療の医師として、マクドナルドはその市と県の歴史に、キリスト教事業の限界を越える足跡を残した。静岡における西洋的事物の具現としての学問所は、オントリオ州の学校カリキュラムに沿って英語教育の基盤を築いた、マクドナルド一家の働きに大いに助けられたと言える。また彼らは西洋医療の発展に貢献し、女子教育への関心を高め、静岡でのキリスト教徒誕生に力を貸した。マクドナルドは、静岡における最初の聖書研究会を指導した前任者クラークの仕事の上にその事業を打ちたてたのである。そして彼の最初の成功は、声望ある家柄の出である日本人キリスト教徒、杉山孫六に負うところが大きい。マクドナルドが静岡を離れた一八七八年には、彼は一つの教会の基礎を築いていた。それは西洋人宣教師の存在なしに存続しうる、約六〇人の会員から成る教会であった。静岡バンドの主要メンバーであったマクドナルドが去った後、彼らが教会を維持する能力を持っていることが立証された。西洋の学術の習得によって、若い改宗者は英語教師、ジャーナリスト、牧師になる新しい機会を得たのである。

静岡バンドには二つのグループがあった。最初のグループには、

初代日本人牧師となった山中笑、そして土屋彦などがいた。二番目のバンドの場合には、一八八〇年代にフランシス・カンディと平岩愼保の影響を受けて、山路愛山、青山学院の高木壬太郎らが改宗した。最初のバンドからは、キリスト教の領域であれ世俗的な場であれ、全国的に著名になった者は殆んど出なかったが、これらの改宗者は、静岡県の各地域に意義深い影響を及ぼした。この影響は、特に西洋的な教育の発展において顕著であった。彼らは明治維新の闘争で敗れた徳川方に属していたが、西洋の研究が、政治から締め出された不利を克服する一つの手段を提供したのであった。

しかしながら、これらの機会は限られていた。最初の改宗者の多くは、英語と西洋の知識を習得することにより、もともと持っていたと思われる世俗的な野望を方向転換させたのである。マクドナルド一家から英語を学んだ時、静岡バンドの初期の人々は、カナダ人に対して深く誠実な気持ちを抱くようになった。マクドナルド一家とキリスト教思想への誠実さから、初期の改宗者は伝道者となった。そのうちの何人かは後に牧師となったが、この事実により、彼らが自覚して世俗的成功の機会を捨てたことが分かる。彼らが活躍するようになった時、自分達がマクドナルドに向けたのと同じ尊敬の眼差しで自分達を見上げる、そのような弟子の集団を作ろうと試みた。クラークとの出会いが、マクドナルドに静岡での機会を与えたように、中村正直をカックランに紹介したのもクラークであった。著

名な儒者であった中村は、西洋の事物についての学習・教育活動の指導者を探していた。中村はすでに米国改革派宣教師S・R・ブラウンと知り合いになっていたが、一八七四年一月初め、横浜でクランの説教を聞いて以来、その博識に深い感銘を受けていた。中村はカックランとその家族に対して、同人社に住み、教鞭を執るよう依頼した。同人社はかつて徳川の家臣であった人々の子弟を教育するために、彼が東京小石川に創立した私立学校である。もちろん、中村はそれまでにJ・C・バラに手紙を書いていたし、アメリカ婦人一致外国伝道協会宣教師M・P・プラインや横浜アメリカン・ミッション・ホームのこともよく知っていた。プラインは、クラークの父が牧会するニューヨーク州アルバニー市第一改革教会の教会員だったのである。カックランの後には、いろいろな宣教師が同人社の教壇に立ったが、中でもC・S・イビーとD・タムソンが最も重要な働きをした。

中村は日本の近代化と啓蒙運動を推進する、明六社という知的集団の指導的な一員であった。中村の翻訳により広く読まれた、サミュエル・スマイルズの『西国立志編』とジョン・スチュワート・ミルの『自由之理』は、高揚した政治的自由と個人主義の発展を通して、多くの明治青年に影響を与えた。中村は一八六〇年代末、英国で洗礼を受けてキリスト教徒になっていたので、カックランが同人社に住み込む前から、キリスト教の知識をいくらか持っていた。一

八七四年のクリスマスの朝、カックランは中村の求めにより二度めの洗礼を授けた。この行為は同人社の学生にとって、キリスト教徒になることへの励ましとなった。一八七四年から一八七九年までの五年間に、ある重要なキリスト教徒のグループが形成された。

即ち小石川バンドが中村と同人社の周辺を土台として作られ、東京にある初期キリスト教徒のグループの一つとなったのである。中村は日本における全国的な名声を持ち、近代化の主だった唱導者の一人であった。小石川バンドは、彼の声望によって守られた中村の弟子達の集まりであり、このバンドの存在は他の人々の改宗を促した。

しかしキリスト教の実践は、このバンドの活動の一面にすぎなかった。彼らは中村と一体となり、一八七四年から一八七九年の間に、彼の名声に助けられ、教育的・知的活動にも参加した。彼らの諸活動の中には、大きな影響力を持つ機関誌『明六雑誌』と、もう一つの重要な雑誌『同人社文学雑誌』に発表された中村の論稿がある。

またカックラン夫人が教えた同人社女学校の設立と、彼女の影響による中村の幼稚園への関心にも言及すべきであろう。つまりキリスト教への改宗は、中村とその仲間にとって超多忙の活躍期におこっていたのであった。

カックランは、自らの役割は伝道に直接関与する仕事にあると考えていた。しかし中村と小石川バンドが関わった広範囲の活動にとって、彼はなくてはならぬ触媒的な役割を果たしていた。彼らにと

ってカックランは、第一にキリスト教思想に力を付与する権威であり、第二に西洋の事物についての生き字引であり、これら二点において絶対不可欠の人材だったのである。カックランは静岡におけるマクドナルドや、その前任者クラークのように、キリスト教思想と他の知的活動の両方に刺激を与えていた。中村は彼自身の考えから、女子教育と幼児教育に対して興味を抱くに至っていたが、これはまたカナダ人宣教師が関心を持っていた分野でもあった。当時、宣教師が研究の重要性を認めていた西洋思想は、通例日本人の関心と一致していたと言える。宣教師は、キリスト教の布教だけでは改宗者を引き付けるには不十分であり、彼らの宣教師活動を成功させるためには、彼ら自身が世俗的活動に取り組む必要があると感じていた。しかし宣教師が、実用主義だけを彼らの行動の動機にしていたかという点、それは誤りである。何故なら彼らの任務は、日本人の魂の救済だけでなく、彼らの生活条件の改善にもあると真剣に考えられていたからである。日本人の福祉のために彼らが心血を注いでいたという事実が、日本人求道者が彼らに引き付けられた理由の一つであった。カックランとマクドナルドは、このような関心をはっきりと持っていたのである。

これと同じ時期の一八七〇年から、築地居留地では米国長老教会C・カロザースと彼の競合者D・タムソンが活動していた。一八七三年からは、アメリカ・メソジスト監督教会のJ・ソーパーが津田

仙のいろいろな学校で教え、A・C・ショーは福沢の学校で教鞭をとっていた。またG・H・F・フルベッキ、E・W・サイル、P・W・ヴィーダー、W・E・グリフィスと静岡のクラークは開成学校で働いていたのである。一方C・M・ウィリアムズ、C・T・ブランシェーとW・B・クーパーは神田地域における伝道活動に従事していた。

しかし一八七〇年代の東京におけるキリスト教、特にプロテスタント史に関する適当な文献を見つけることは難しい。最近出版された『明治のキリスト教』の中で高橋昌郎氏は、キリスト教が近代日本の政治、社会、思想などに重要な影響を与えたと述べている。しかし東京の知的環境については、あまり詳しい記述はない。またH・ドラモンドの著書のように英語で書かれた日本キリスト教史の書物によっても、詳しいことを知ることはできない。つまり明治初期の東京におけるキリスト教の場合には、これから研究しなければならぬ分野がたくさん残されているということである。

カックラン、マクドナルドと中村正直の活動は、日本におけるプロテスタント・キリスト教の初期のことであるが、次は明治末期から大正期にかけて、登山の普及に足跡を残した宣教師ウォルター・ウェストンに関する事例である。ウェストンは最初神戸で活動していたが、後には英国人教会の牧師として横浜で働く傍ら、そこを訪れる外国人船員にも伝道した。しかし日本人への伝道に直接関わっ

たことはなかった。

2

北アルプスの夏山シーズンは、毎年六月第一日曜日のウェストン祭によって、その幕を開ける。これは、人気レジャースポーツとしての登山を広めた西洋人パイオニアの代表、ウォルター・ウェストンにちなんで始められた行事である。英国国教会の牧師であったウェストンが、このような形で記憶されているということは、スポーツが長い間異文化交流の一例であったことの表れである。更に、スポーツが土着の文化に対抗して知的挑戦を迫ることもなく、また外国の優れた考えにかぶれるように一時の流行に流されるものでもない、長く保たれてきたと考えることもできる。日本はこうして何百というスポーツを外国から取り入れてきたのであるが（もともと、日本の伝統的スポーツも、外国に数多く輸出されているが）、ウェストンは、西洋の一個人として日本に新しいスポーツを誕生させたという点で、極めてユニークな存在であると言える。

日本アルプス登山家の草分けとしての名声のほかに彼が残した大きな遺産は、その著作の中に描き出された日本の山々と、そこに住む人々の姿であろう。他人に奉仕するキリスト教精神と、山々とそこに住む人々への愛情は、ウェストンの人生の二大目標であった。そしてこれらを実践するのに、日本は大きな協力をしたと言える。

といっても、彼は現役時代をずっと日本で過ごしたわけではない。日本での勤務は一八八八―一八九五年、一九〇二―一九〇五年、一九二一―一九二五年という三つの期間に分かれている。しかしここで注目すべきことは、彼が日本を離れている間も、英国人読者を対象に、日本を紹介する幅広い執筆活動を続けていたという事実である。ウェストンは一八九六年から一九二六年の三〇年間に四冊の書を著したが、その内の三冊は最後の日本滞在を終えた後に執筆されている。これらの本は最近平凡社のシリーズとして出版された。しかし面白いのは、ウェストンの日本人と大正期の日本に対する姿勢である。二つの例を見てみよう。

一九一五年五月に英国山岳登山家の草分けの一人、王立地理学協会会長であるダグラス・フレッシュフィールドは、日本の北アルプス探検についての論文を発表したウェストンについて、「まさに彼は日本にヨーロッパ的感覚でとらえた山々と風景とを伝道した使徒である」と評し、さらにその根拠として次のように述べた。

ウェストンは、日本人には体を動かすスポーツが大変不足している事に気づいた。確かに、彼らには相撲や剣道があるが、英国人が娯楽として楽しんでるクリケットやゴルフのような戸外のスポーツに相当するものがない。そのために彼は山に登ること自体を楽しむ精神を、日本人に植えつけようと試みて、実

に、これに成功したのである。⁽⁸⁾

ウェストンが好んだのは都会ではなく日本の田舎であった。一九二五年に、彼は次のように書いている。

日本人の生活の最も特徴的なあり方や、国家としての真の力を深く洞察することが出来る所は、田舎を措いてほかにない。日本の国民性の最も魅力的な面を知りたければ、西洋化した大都会や開発された地域から遠ざかり、世界一知的で勤勉で愛想のよい農民が耕す田畑が広がる田舎に行かなくてはならない。⁽⁹⁾

ウェストンの日本におけるアルプス探検は、都会の中心部で進んでいる工業化や近代化の中で消滅しつつある、自然と人間の両方に内在する自然のままの姿や純粋性を探求しようとする彼の気持ちの表れである。田舎の人々、特に山岳地帯に住む人々とともに過ごしながら、彼は次のような感想を書き記している。田舎に住む人々の日々の生活と労働に見られる開放的で共同生活的特徴には、心惹かれるものがある。きっと彼らが大自然やその営みと始終接しながら暮らしているからであろう。それは、人々を一層自然で情け深くし、そして、お互いにいつでもすぐに助け合う思いやりの心を育むものである。田舎でこそ人々は純粹無垢でいられる。都会人とは対照的

に、田舎の人々は、この人間性に加えて生来の天真爛漫さを備えている。日本の旧称である「君子の国」の雰囲気を真に体現し続けているのは、実は田舎に暮らす人々なのである。英国紳士を自認するウェストンは、日本の田舎を「君子の国」⁽¹⁰⁾と呼ぶことが気に入っていたらしく、これがすべての著作の共通の主題になっている。

一九二〇年代の日本は、ウォルター・ウェストンにとっては、あまり好ましいものではなかったようだ。確かにウェストンにとって、日本人への関心の第一は、何よりもまずキリスト教に関することであった。しかし彼にとって一九二六年における最大の関心事は、日本社会における変化であった。彼はキリスト教の影響によって、より良い社会が実現することを相変らず信じていた。それにもかかわらず、かつてゆっくり観察することが出来た田舎の人々の伝統的な暮らしぶりが、工業化した社会の物質主義的価値に見るうちに置き換えられていくのを目の当たりにして、ウェストンは変わりゆく日本の姿を不安な気持ちで眺めていたのである。

登山を娯楽スポーツとして広めたウェストンの努力は、より良い社会の建設に確かに大きく貢献した。そしてこの貢献こそが、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて英国が日本に与えた影響の中で、長く受け継がれてきた意義深い遺産として歴史に刻まれるべきものである。ウォルター・ウェストンは日本人を心から愛していた。彼は言う、「我々が接してきたさまざまな人種の中で、日本人ほど

自然への愛着を、生まれながらにして強く備え持ち育んでいる人種はいない。彼らの自然を愛する心は、生活全体に行きわたり、日々の営み、休日の娯楽はもちろんのこと、宗教、美術、詩など文化全般を特徴づけている^①。つまり彼は、日本人が自分と同じ感受性で、自然を愛する喜びを享受してきたと考えていたのである。彼が愛したのは日本の田舎とその伝統的価値であって、工業化、商業化した近代日本の姿ではなかった。工業化にまさに成功した日本は、ウェストンにとってもはや魅力ある国ではなかったと言える。結局、ウェストンは日英の交流を個人レベルで実践した人であった。恐らくその結果は具体的数値で表わされることはないであろう。しかし豊かな成果は、このような接し方から生まれるものなのである。

その後一九三〇年代の半ばを迎えると、日本は国内外で多数の社会的、政治的、経済的、軍事的難問に直面し、そのために宣教師の対日布教活動もかつてない試練を受けるようになった。特に日本聖公会にとっては、英国との関係において大変難しい時期であった。ちょうどこの時期の一九三三年に、サミュエル・ヘーズレット南東京地方部主教が日本聖公会の主教会議長に就任したのである。

3

ヘーズレットは戦前最後の宣教師主教会議長である。戦時下の「特高警察」による弾圧は、彼の監獄での経験を記した『日本監獄

から』という著作を通して英国ではよく知られている^②。ヘーズレットは一八七五年、北アイルランドのベルファスト市に生まれ、ダーム大学を卒業直後の一九〇〇年に、英国聖公会宣教協会の宣教師として来日した。徳島県、千葉県、聖公会神学院等で働いた後、一九二二年に南東京地方部主教となり、一九三三年には日本聖公会総会議長、主教会議長に就任した。もちろん二〇年代、南東京地方部主教に就任直後に遭遇した、関東大震災による多くの教会建物の崩壊は、ヘーズレットにとって大きな試練であった。しかし一九三七年の出来事により、彼の指導力がさらに一層問われることになる。

一九三七年秋、中国北部における日本の行動について、英国のロンドン市に抗議する有名な集会がアルバート・ホールで開かれ、カントベリー大主教コズモ・ラングがその議長を務めた。英国人宣教師が当時直面した困難を理解する一つの方法は、ラングの役割に対する日本側の反応に目を向けることである。日本人は、カントベリー大主教の行為は日中戦争に対する英国政府の態度を如実に示すものだ、という誤った判断を下す道を選んだ。そもそも、同年三月、ラングは貴族院でエチオピアにおける虐殺を批判し、イタリアによる毒ガスの使用に抗議するよう、政府に要請していた。同年九月ラングは、一〇月初めにアルバート・ホールで予定されている集会の議長を務めるよう、『ニューズ・クロニクル』の編集者ジェラルド・バリから要請された。集会の目的は、中国における民間人への

無差別爆撃に抗議することだった。もしラングがこの集会に参加すれば、英国国民による抗議の流れを決定づけることになる、とバリは考えていたのである。

集会の直前、ネヴィル・チェンバレン首相はラングと会見し、ラングが議長を務めれば、かえってマイナスの効果が生じるかもれないと警告した。しかし抗議集会への参加をはっきりと禁じたわけではなかったのである。そこでラングも、自分の行為を正当化できたのだと言える。

議長就任の決断を駐英日本大使吉田茂に説明する手紙の中で、ラングはこう記している。

私は、わが国における道徳的な世論、とくにキリスト教的な世論を代表するという立場にあり、こうした感情を何らかの形で表明することを断念するわけにいきませんでした。もつとも、その際に適切な慎みは忘れないようにいたしたく思います。⁽¹⁵⁾

カンタベリー大主教の抗議集会への参加は、英国人宣教師に向けられた日本側の疑念を一気に深めることになった。例えば松井米太郎東京主教は、大主教の行為は「われわれと英国教会との関係の終了」を意味するとまで言ったという。塚田理によれば「アルバート・ホール事件」は、日本聖公会の完全独立を望む一部の日本人信

者達の欲求に火をつけたのみならず、「特高警察」の注意を日本聖公会に向けさせ、最終的には、スパイ容疑による、ヘーズレット主教ほかの逮捕という事態を招いてしまったのである。もちろん、こうした困難は宣教師自身が招いたものだと論じることも不可能ではないだろう。一九二〇年代から三〇年代初頭にかけて、日本聖公会が西洋人主教から日本人主教への権力の移行を怠ったことに原因がある、というように。しかし「アルバート・ホール事件」の後に発生した危機については、英国人宣教師の側で事前に何らかの準備をしておくことなど到底不可能だった。

日中戦争の開始が日本聖公会、さらに日本のキリスト教運動全体にすぐさまたらした帰結の一つは、戦争遂行を目的とした、政府による全宗教団体の精神的動員であった。日本聖公会にとっては、中国における日本政府の政策が、宗教団体の自発的な精神動員から宗教団体の立法化へと転換したことを意味した。この法律は、日本聖公会を支えている教会の監督制度そのものを解体の危機にさらすものと見なされたのである。しかし日本聖公会が宗教団体に抗議することはなかったために、一九四〇年代の初頭、ベイジル・シンプソン神戸主教は、「あらゆる日本人と同様、日本聖公会もまた、当局への抵抗は殆んど不可能であると考えている」と述べ、この沈黙を手厳しく批判した。しかしこのような意見は、日本人からは歓迎されなかったと言っていいたいだろう。⁽¹⁶⁾

日本聖公会内部での英国人の役割は終了しようとしていた。英国人宣教師への敵意は一九四一年一二月に燃え上がったが、宣教師の多くはすでに日本を離れていた。日本に留まった宣教師は、抑留されるか、さもなくばヘーズレットのように逮捕され、後に交換捕虜として帰国した。日本と西洋の国々との間に展開された宣教師の時代が、まさに終焉を迎えようとしていたのである。もちろん、終戦以降も、新しい宣教師は日本にやって来た。しかし経済、政治、文化など、西洋からのさまざまな影響が、日本人と日本社会に対して大きな力を持った時代は終わり、日本と西洋との関係におけるキリスト教およびその伝道運動の位置づけは、戦前とは違ったものになってしまったのである。

史料ノート

三つの宣教師の事例を見るにあたり、以下の史料を使用した。明治時代のカナダ宣教師についての史料は、カナダ・トロント市にあるトロント大学ヴィクトリア・カレッジ内のカナダ合同教会史料館所蔵のものを利用した。ウェストンの場合は、東京にある日本山岳会本部で、彼の本と論文を集めることができた。また日本聖公会の一九三七年から四〇年代終わりまでの活動については、英国ロンドンにあるランバス・パレス図書館所蔵の史料を使用した。なかでもラング大主教とフィッシャー大主教との通信は非常に興味深いもの

であった。

注

- (1) 日本におけるキリスト教史に関する最新の英語文献は、Mark R. Mullins, ed., *Handbook of Christianity in Japan* (Leiden: Brill, 2003). 最も有用なのはOtis Cary, *A History of Christianity in Japan*. 2 vols (New York: F. H. Revell, 1909). さまざまな情報源となるのはErnest E. Best, *Christian Faith and Cultural Crisis: The Japanese Case* (Leiden, E. J. Brill, 1966); Richard H. Drummond, *A History of Christianity in Japan* (Grand Rapids, Michigan: W. B. Eerdmans, 1971) である。日本キリスト教史に関する最新の研究書は、高橋昌郎『明治のキリスト教』東京、吉川弘文館、二〇〇三。私が最も影響を受けたのは、隅谷杉井、土肥、大濱、高橋、小檜山、塚田、大江の各著書と、同志社大学人文科学研究所発行の『キリスト教社会問題研究』である。
- (2) 中村正直に関する本は、高橋昌郎『中村敬宇』東京、吉川弘文館、一九六七。荻原隆『中村敬宇と明治啓蒙思想』東京、早稲田大学出版部、一九八四。
- (3) ウェストンの著書には次のものがある。Walter Weston, *Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps* (London: John Murray, 1896); *The Playground of the Far East* (London: John Murray, 1918); *A Wayfarer in Unfamiliar Japan* (London: Methuen & Co., Ltd, 1925); *Japan* (London: A. & C.

Black, 1926). なおウェストンの著書が、水野勉の翻訳により平
凡社ライブラリーから出版された。

- (4) 日本におけるカナダ・プロテスタント伝道活動に関する研究書
としては下のものがあろう。A. Hamish Ion, *The Cross and the Ris-
ing Sun : The Canadian Protestant Missionary Movement in the
Japanese Empire, 1872-1931* (Waterloo : Wilfrid Laurier Uni-
versity Press, 1990-1993) と A. Hamish Ion, *The Cross in the
Dark Valley : The Canadian Protestant Missionary Movement in
the Japanese Empire, 1931-1945* (Waterloo : Wilfrid Laurier
University Press, 1999) また情報源的な本としては、倉長巍編
『加奈陀メンモニスト日本伝道概史』東京、加奈陀合同教会宣教師会、
一九三七がある。
- (5) カナダ・メンジスト静岡伝道については、飯田宏『静岡県英学
史』東京、講談社、一九六七。太田愛人『明治キリスト教の流
域：静岡ハンズと幕臣たち』東京、築地書館、一九七九参照。
- (6) 私が通っていたカナダ聖公会系の高等学校、Trinity College
School, Port Hope, Ontario. ロイヤル・セント・ジョージ、白井堯子『福沢
諭吉と宣教師たち：知られざる明治期の日英関係』東京、未来社、
一九九九参照。
- (7) 高橋昌郎『明治のキリスト教』東京、吉川弘文館、二〇〇
三。
- (8) *Geographical Journal*, XLVI (July-December 1915), 198.
- (9) Weston, *A Wayfarer in Unfamiliar Japan*, 29.
- (10) Weston, *A Wayfarer in Unfamiliar Japan*, 18-19.

(11) Weston, "Influence of nature on Japanese character," *Geo-
graphical Journal*, LXIII (January-June 1924), 111.

(12) Samuel Heasley, *From a Japanese Prison* (London : Stu-
dent Christian Movement Press, 1943).

(13) 日本聖公会歴史編纂委員会『あかしひとたち—日本聖公会人物
史』東京、日本聖公会出版事業部、一九七五、一三〇。

(14) Lambeth Palace Library, London, England. Archbishop
Cosmo Lang Papers, volume 6 : China : Memorandum of Meet-
ing with the Prime Minister [Neville Chamberlain], October
1937.

(15) Lambeth Palace Library, London, England. Lang Papers,
volume 6 : China : Lang to Yoshida Shigeru, October 4 1937.

(16) United Society for the Propagation of the Gospel Archives,
Oxford, England. Kobe Letters Received 1940. Simpson to
Hudson, March 23 1940.